アジア研究協会 35 周年記念講演会

35 年間のアジア研究でわかったこと、35 年間でアジアがかわった点

日時：２０１０年3月１９日（金）

会場：国際文化会館（〒106-0032　東京都港区六本木5-11-16）

岩崎小弥太記念ホール　15：00～18：00　講演会

柳山・松本ルーム　18：00～20：00　記念祝賀会

プログラム

15：00−15：10　挨拶　立本成文理事長

15：10−15：30　地域研究の発展について　平野健一郎（早稲田大学教授）

15：30−15：50　35 年をふりかえって　市村真一（京都大学名誉教授）

―― 講演 ――

15：50−16：30　村井友秀　（防衛大学教授）

「東アジアの戦争と平和」

16：40−17：20　城山智子　（一橋大学教授）

「上海の 150 年：開港場から博覧会都市へ」

17：20−18：00　河村昌子　（千葉商科大学准教授）

「ポスト文革の中国文学ー張承志の文学活動を軸にー」

18：00−20：00　記念祝賀会

問い合わせ
〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
東南アジア研究所内
財団法人　アジア研究協会　事務局
TEL：(075) 753-7351
E-mail：asia35@cseas.kyoto-u.ac.jp
web Site：http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/jsas/

アジア研究協会 35 周年記念講演会

35 年間のアジア研究でわかったこと、35 年間でアジアがかわった点

日時：2010年3月19日(金)

会場：国際文化会館

岩崎小弥太記念ホール　15：00～18：00　講演会
樺山・松本ルーム　18：00～20：00　記念祝賀会

〒106-032　東京都港区六本木 5-11-16　TEL：03-3470-4611

東アジアの戦争と平和

村井友秀

過去 500 年間の欧州を見ると、最強国とそれに次ぐ国（挑戦国）の力が接近している時に戦争が発生した。逆に 2 国間に大きな力の差が有るときは平和であった。最強国（覇権国）の軍事力が圧倒的に強ければ、その他の国は覇権国に反抗しない。覇権国も軍事力を直接行使しなくても圧倒的な軍事力の威嚇だけでその他の国を支配できるからである。一方、現状に不満を持つ挑戦国（現状変更国）が覇権国よりも優位に立ったと認識すると、現状変更国は速やかに新体制を確立するために覇権国（現状維持国）を攻撃した。

東アジアにおいても 19 世紀中頃までは中国が東アジアの覇権国であったが、19 世紀末になると日本が台頭して両国の力が接近し、中国の覇権に日本が挑戦して日中戦争が発生した。第二次世界大戦後は、世界第 2 位の経済力を持った日本と貧しい中国という関係であったが、20 世紀末から中国が急速に力を拡大し、日本を抜いて世界第 2 位の経済大国になりつつある。パワーシフトが進行している東アジアにおいて平和を維持するためには新しい安全保障体制を構築しなければならない。

上海の 150 年：開港場から博覧会都市へ

城山智子

2010 年 5 月 1 日から 10 月 31 日まで、中華人民共和国上海市で、国際（万国）博覧会が開かれる。現在、黄浦江沿岸の万博会場で施設の工事が進められると共に、市内各所では、道路の拡張や景観の整備などが大規模に進められている。そこからは、「より良い都市・よりよい生活」をスローガンとする今回の万国博覧会を、上海という中国経済のセンターで開催することが、大きな意味を持っていることが分かる。ここで、都市発展の過程を振り返るならば、上海は常に、中国の中で特殊な地位を占めてきた。1843 年の開港後、租界と呼ばれる特区が設けられ、以後、金融・貿易・製造業の中心として機能した。

そうした状況は、日中戦争下の「孤島の繁栄」と言われる時期を経て、1949 年、中華人民共和国政府に引き継がれることになる。爾来、上海都市経済にどのように対峙するかは、政権の重要課題の一つであり続けている。今回は、こうした上海という都市の変遷をプリズムとして、近現代中国の政治と経済について考えてみたい。

ポスト文革の中国文学　－張承志の文学活動を軸に－

河村昌子

文化大革命以降、中国が改革開放路線へ転じると、中国文学も変化した。文革の痛みを主に被害者の視点から語るいわゆる傷痕文学を皮切りに、個人の表現意欲が表出した。やがて欧米の文芸批評にも影響された世界文学への志向から、実験的な手法を取り入れたモダニズム文学が隆盛を極め、ひとつの主流となっていった。

そのような動きの中で、文革時期に紅衛兵運動の主導者だった張承志は、当時の理念を保持したまま、文筆家として特異な位置に立ち続けている。文革後の張承志は、自らの民族的出自である回族に目を向け、中国西北地方の回教徒を調査するうち、自身も回教徒に転じた。現在も回教徒の立場から、世界情勢を視野に入れた批評・創作を続けている。

一貫して弱者に寄り添う張承志の批判精神は、世界と中国が向かうところへ対抗的に切り込み、示唆に富む。張承志の文学活動を座標軸に、ポスト文革の中国文学を見てみたい。

村井友秀

職名
防衛大学校総合情報図書館長兼教授
学歴
1981 年　東京大学大学院国際関係論博士課程退学
職歴
1978 年　米国ワシントン大学国際問題研究所研究員
1993 年　防衛大学校国際関係学科教授
2005 年　防衛大学校人文社会科学群長
2007 年　防衛大学校図書館長
専門分野
東アジア安全保障、国際紛争論
著書
2007 年
共著『中国をめぐる安全保障』ミネルヴァ書房
共著『現代の安全保障』明石書店
2006 年
編著『写真が語るベトナム戦争』あすなろ書房
2005 年
共著『戦略の本質』日経新聞社
2004 年
編著『戦略論大系　毛沢東』芙蓉書房

城山智子

一橋大学大学院経済学研究科　教授。1965 年、東京生まれ。

Ph.D. (Harvard University, 1999, History)

専門は、近現代中国経済史、アジア経済史。戦前期中国の、金融、通貨制度、企業経営、都市・農村関係などに関して研究を行い、China During the Great Depression: Market, State, and the World Economy, 1929-1937 (Harvard University Asia Center, 2008) にまとめた。

近年は、1949 年前後の華南農村と華僑送金といった中華人民共和国建国後の問題に研究関心を広げると共に、華僑と印僑の比較、国際金融危機の比較など、国際比較をテーマとした共同研究などに参加している。1994 年から 95 年に南京大学に留学して以来、1 年に 1、2 回は、華中・華南地方を中心に調査研究を行い、定点観測を続けている。

河村昌子

千葉商科大学商経学部准教授。中国近現代文学専攻。1969 年生。

1991 年お茶の水女子大学文教育学部卒業、1993 年お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程修了、1999 年お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了、博士（人文科学）。2000 年千葉商科大学専任講師を経て現職。

主な論文に、佐藤保、宮尾正樹編『ああ哀しいかな―死と向き合う中国文学―』（汲古書院 2002 年）所収「蕭珊、弔いえぬひと―巴金『随想録』にみる追悼の形」、「声なき声を語る―張承志の最近の時評から―」『中国研究月報』第 680 号 2004 年など。翻訳に、盛可以「手術」（桑島道夫、原善編『現代中国文学短編選』鼎書房 2006 年所収）、高行健「主義を持たない主義」「中国流亡文学の困難」（『藍 BLUE』総第 20 期 2005 年）など。